発達理論の学び舎

Back Number: Vol 124

Website:「発達理論の学び舎」

© YOHEI KATO 2018

目次

2461. ある人間の個人史

2462. 春の夢

2463. 日々のドラマと物語

2464. 予感

2465. 雨降る夜に

2466. 夢のパターン

2467. 満ち溢れた世界の中で

2468. 雨上がりの夕方に

2469. 欧州で迎える三年目の生活に対する予感

2470. 魂の特性と対象との出会い

2471. 静寂への道

2472. 転調技術の習得に向けて

2473. 欧州での旅のあり方と井筒俊彦先生の書籍

2474. バッハとこれからの十年

2475. 国王生誕日の夢

2476. 言葉の密度と強度と一日の充実感

2477. 真善美の現れ

2478. 調和的進化に向かって

2479. 仮眠中の現象の探究に向けて

2480. 突然の促し:デッサンの始まり

© YOHEI KATO 2018

2461. ある人間の個人史

時刻は夜の九時を過ぎた。しかし、この時間帯のフローニンゲンはまだ完全に闇に包まれているわけではない。九時を過ぎてもまだ真っ暗ではないほどに日が延びたことに驚かされる。フローニンゲンに戻ってきてからの二日目も非常に充実した日であった。

てっきり今日は日曜日かと思ったが、今気づいてみると今日は月曜日だったのだ。確かに今日は早朝に、協働プロジェクトに関するオンラインミーティングを行なっており、平日だったのだということを今になって了解した。それほどまでに曜日の感覚というものが薄れていく。

一人の人間がある一つの街でその人なりの生き方を通じて日々を生きていくということ。私はそうした個人史を見聞きするのが好きだ。同じ街で生きているにもかかわらず、こうも多様な生き方があるということに驚かされたことはないだろうか。私たちの日々はこうも多様であることに感動をしたことはないだろうか。

ワルシャワとブダペストを訪れた際にも、私はそれらの街で生活を営む人たちの多様な個人史に心を打たれた。すると、自分も独自の個人史を常に綴りながら日々を生きていることに気づいた。なぜ自分がオランダ北部のこの街で日々生活を送っているのか、そしてなぜこの場所で三年ほど生活をすることになったのか、その深層的な意味は未だに謎に包まれている。

だが、一つ明確なことは、ここでの生活が間違いなく自分の個人史にとって欠くことのできない大切なものだということだ。いつかこの三年を振り返る日がきっと来るだろう。この三年間、自分が毎日何を感じ、何を考えながら生きていたのか。それらは全てこの一連の日記に書き綴られている。私はこれからも日々を固有に生きた証として日記を書き留めていきたい。それは、自分という一人の人間がこの世界で生きた固有の個人史となる。

九時半を迎えようとしている今、辺りは限りなく暗くなった。そろそろ一日の仕事を終え、明日に向けて準備をする時間だ。振り返ってみると、今日は早朝のオンラインミーティング後から論文の執筆に集中することができた。順調に文章を書き進めていくことができ、明日は朝から論文の執筆に取り掛かる。

明日はまず、論文の“Results”のセクションから取り掛かろうと思う。中欧旅行から戻ってきた翌日に完了したデータ分析の結果をこのセクションに盛り込んでいく。その後、論文のセクションを少し戻る形で、“Method”と“Procedure”のセクションを書き進めていきたいと思う。明日の夜に論文アドバイザーのミヒャエル・ツショル教授に論文の最初のドラフトを送る。最初のドラフトでは“Results”までに留め、最も思考を巡らせる“Discussion”のセクションは次回のドラフトの中に盛り込んでいく。明日も集中して論文を執筆することができるだろう。

日記にせよ、論文にせよ、そして作曲にせよ、創造行為がもたらすこの生命の躍動感、もしくは魂の歓喜にも似た感覚をどのように伝えることができるだろうか。仮にそれらを言葉として表現できなくても構わない。重要なことは、それらの感覚を通じてこれからも絶えず創造行為に従事し続けるということだ。フローニンゲン：2018/4/23（月）21:33

2462. 春の夢

今朝も昨日と同様に六時過ぎに起床した。いつものように身体を少しほぐしたところで、六時半あたりから一日の活動を開始させた。

今日はフローニンゲンに戻ってきてからの三日目となるが、生活リズムはすでに中欧旅行に行く前と同じものになっている。書斎の窓から外の景色を眺めると、今日はどうやら曇りがちの日のようだ。時間帯によっては今日は雨が降るらしい。昨日までは晴れ間が広がり、気温も高かったのだが、今日からは肌寒い日が続く。

昨年のこの時期を思い出してみると、まだ冬用のコートとマフラーを着用していた。ここ数日間の天候はもしかすると少しばかり異常だったのかもしれない。まだクリーニング屋にはコートとマフラーを出さないようにしようと思う。

今朝方、少しばかり印象的な夢を見た。欧州での三年目の生活拠点をどこにするのかということが焦点だった。現実世界においては、私は引き続きフローニンゲンで欧州での三年目を過ごそうと思っている。一瞬だけアムステルダムやロッテルダム辺りで暮らすことも考えたが、フローニゲンが最も落ち着く場所だろうと判断した。それに引越しの労力を考えると、オランダ国内で生活拠点を変える

ことは賢明でないように思われた。今度引越しをする際には生活をする国そのものを変えることになるだろう。

夢の中で私は、フローニンゲンを離れ、イギリスで生活を始めていた。おそらく場所はイギリスの中規模の街なのではないかと思う。そこは学術都市であり、街の中心部もそれほどガヤガヤしていない。ほどよく落ち着き、ほどよく活気があるといった街だった。

その街で生活を始めるにあたって、私はまず住む家を探していた。頭の中には事細かなチェックリストがあり、浴槽の有無や部屋からの景色など、様々な条件に合致した家を私は探していた。少しばかり苦労してようやく目星の家を見つけることができた。そこでの生活を始めた直後に、私はその場所がイギリスなのかオランダなのか分からなくなった。

頭の中が混乱し、部屋の外に出てみると、そこはフローニンゲンだったことに気づき、なんとも言えない安堵感を私は感じた。そこで夢の場面が静かに変わった。

次の夢の場面では、様々な木々が植えられている河川敷のような場所を私は歩いていた。私の隣には友人か誰かがいて、目に映る多様な花々について教えてもらっていた。

私:「あっ、桜だ」

友人らしき人物:「あれは桜じゃないよ。あれは梅の花だよ」

私:「そうなんだ。それじゃあ、その隣の花は？」

友人らしき人物:「あぁ、あれは確かに桜の花だね」

友人らしき人物がそのように述べると、梅の花びらと桜の花びらが交差しながら地面にひらりひらりと落ちてきた。そよ風に乗って、それらの花びらが舞い落ちる光景はどこか恍惚とさせるものがあった。

その後、この夢がどのように進展して行ったのかはもう覚えていない。梅の花と桜の花が綺麗に咲き誇っており、それが舞う情景だけが鮮明に記憶に残っている。

今日は昨日よりも風が緩やかだ。時刻は早朝の七時を迎え、人々が一日の活動を開始させたことがなんとなく分かる。今日も静かで活動的な一日になりそうだ。フローニンゲン：2018/4/24（火）07:04

2463. 日々のドラマと物語

通りを走る車や自転車の数が増えてきた。いよいよ今日も本格的にこの街が動きだす時間となった。

この街で私は一人の人間の生き方の可能性を模索している。私という一人の人間の一生を真に自分の人生として生きることとは、一体どのような生き方を指すのだろうか？そんなことを長らく考え続け、今は一つその答えらしきものを通じて日々を生きている。この街の景色を書斎の窓から常に眺め、自らのライフワークを一歩一歩進めていく日々。そうした日々が一日、また一日と積み重なっていく。

結局私はそうした日々を、この街で千回以上送ることになった。だが、三年という月日は長いようでいて短いようにも思える。わずか千回の日々が、固有のドラマを持っていることに驚かされる。「どうして日々がこうも異なるドラマを持っているのだろうか？」という問いを立てざるをえない。

そのシンプルな回答は、「外面世界と内面世界の双方が絶えず変化しているからだ」となるだろうか。だが、驚きを隠せない観点はそれではない。外面世界と内面世界の絶え間ない変化を生み出しているものの正体が何であり、それがこうもありありと自分の人生に影響を与えているという点に驚いているのだ。日々は本当に毎日が新しく、毎日が異なった様相を帯びている。

「同じ川に二度足を踏み入れることはできない」というヘラクレイトスの言葉を思い出す。今日もまた二度と同じ日がやってこないであろう大切な一日になる。今日という唯一の日に起こる小さな固有のドラマを日記に書き留めておきたいと思う。毎日毎日異なるドラマを見ていることは、やはり深い神秘の念を私に引き起こす。

日々の一つ一つのドラマのその先に、一つの大きな物語が待っているのだろうか。そんなことも考える。一人の人間が固有の人生を生きるというのは、その人固有のドラマに気づき、その先に待つ

大きな物語に向かっていく生き方のことを指すのかもしれない。私にできるのは、そのドラマを日記や曲として形にすることであり、それを通じて大きな物語に向かっていくことだろう。

今日は昨日に引き続き、論文の執筆に集中したい。今日は論文を書くためにある日なのだ。午前中から夕方にかけて集中的に文章を書いていく。希望としては、今日の段階で論文の骨格は全て完成し、七割型完成したと言えるところまで文章を書いていくことである。まずは昨日からの続きとして、論文の“Results”のセクションから書き始める。

そのセクションを書き終えた後に、構成を前に戻る形で、“Method”と“Procedure”のセクションを書いていく。今日の執筆はここまでを目処にし、その後は、ブダペストの古書店で見つけた“Theoretical Knowledge (2005)”を読み進めることや、久しぶりに森有正先生の日記に目を通したいと思う。今日という一日がどれだけ充実したものになるかはもう目に見えている。だがそれでも私は、今日という固有の一日が深く充実したものになるだろうということをあえて書き留める。

書くことは創ること。創ることは生きること。書くことは生きることである。フローニンゲン：2018/4/24(火)07:27

2464. 予感

中欧旅行から帰ってきてふと気づいたが、近所の道路の工事がいくつか完成し、随分と綺麗になった道がある。私が見ていないところで働き続ける人たちの仕事がここに結実されているのだとはっきりと見て取ることができる。誰の目にも止まらないところで仕事を進め、それが誰かに資するものになるということ。それが人間の仕事の本質の一つのように思えてくる。

中欧旅行で書き留めた日記の整理がまだ追いついていない。実際には、まだ書き留められていないことがいくつもあり、あの旅を振り返る時間はこれからもまだまだ必要だと言える。

中欧旅行の過程の中で感じていた流麗な流れが、自分の人生の中に流れ込んできているのを感じる。ワルシャワで流れていたなんとも言えない雰囲気やブダペストのドナウ川の流れなど、諸々の事柄が一つになった流れが自分の人生に流れ込んできている。私たちの一生は本当に流れだったのだ、ということを改めて強く実感させられる。

今日はこれから論文を執筆していく。早朝からこの時間帯にかけて日記を執筆したり、過去の日記を編集していたため、論文を書いていくための準備は整っていると言える。自分の意識が構成的なものに変わりつつあることがそのサインである。この構成的な意識は、自分の内側にあるものを外側に形として表現していく際に不可欠なものである。時計職人が精密な時計を作っていくのと同じように、論文の文章を精密に積み上げていこうと思う。

先ほど、解放とは何か、自由とは何かについて思いを馳せていた。それらは未だ難しいテーマだが、欧州での日々が一日一日と過ぎていく中で、それらのテーマの重要性が増していく。不必要な制約があるとすればそれは何であり、必要な制約があるとすればそれは何であるかを考える。不必要な制約からの解放の手段とその意義について考えが及ぶ。

自由の要件と特徴について考えが及び、真の自由と人間本質との関係性について考える。そうしたことに思いを馳せずにはいられない日々がここにある。そうした探究的な問いを最初から人間全般に拡張させて考えることは適切ではない。兎にも角にも探究の出発地点は自己に立脚したものでなければならない。そうでなければ、発見された気づきというものが根無し草になってしまう。

今の自分にとっての制約や自由とは何かを考えることは、随分と忍耐を要求することなのだと感じる。自らに引き寄せてそれらの問いを考えることから逃げようとするとき、無用にも人間全般に思考を拡張させようとするのかもしれない。ここからも、自分の内面と向き合うことがどれほど困難かが痛いほど分かる。いつも私は自分の内面と向き合うことから避けているかのようにすら思えてくる。

欧州での三年目の生活は、これまでの二年以上に自分と向き合うことが必然的に要求されてくると思う。それはもはや明確だ。窓の外の街路樹を眺めると、昨日まで裸だったつぼみから緑色の芽が出ていることに気づいた。また何かが始まろうとしている。フローニンゲン：2018/4/24（火）09:19

2465. 雨降る夜に

今日も気付けば一日が終わりに近づいている。いつもはこの時間帯には日記を書き留めないのだが、今日は夜まで論文を書き続けていたので日記を書き留める時間がそれほどなかった。就寝前に今日の振り返りをしておきたい。

今日は無事に、論文の大枠を執筆することができた。より厳密には、論文の構成を全て明瞭なものにし、論文の中でも重要な分析結果のセクションを執筆することができた。もちろん、“Discussion”のセクションこそが著者の考えを存分に盛り込める箇所であることは確かだが、自分が行った分析の結果を正しく解釈していく“Results”のセクションはとても大切な箇所になる。とりわけ、今回の研究では非線形ダイナミクスの手法を活用していたり、統計的な手法を複数活用しているため、それらの分析結果を丁寧に執筆していくには時間を要した。

今日は朝から夜の時間帯にかけて論文の執筆に専念していたと言える。夕食を摂り終えた後、そこから少しばかり文章を執筆したところで、論文アドバイザーのミヒャエル・ツショル教授に論文のドラフトを送った。

当初は今週の金曜日にミーティングを行う予定であったが、その日がオランダの祝日であることが昨日判明し、協議の末にミーティングは来週の月曜日に行われることになった。ミーティングの日が少し伸びたことに伴い、次回のミーティングまでにまた論文を書き進めていくことができるだろう。

明日はちょうど研究インターンの評価ミーティングが行われるため、自宅から歩いて30分ほどの距離にあるザーニクキャンパスに午後から足を運ぶ。明日はあえて論文の執筆に取り掛かることをせず、明後日から再び論文の執筆に取り掛かる。意識的に一日文章を寝かせ、そこから四日連続で文章を書き続けていけば、来週月曜日のツショル教授とのミーティングまでに随分と論文の執筆が進むだろう。明後日からは、“Method”と“Discussion”のセクションに取り掛かる。

四日あれば、この二つのセクションもほぼ書き上げることができるだろう。月曜日までに論文の八割を完成させることができれば理想である。実際の論文の提出まであと二ヶ月弱あるため、来週の時点で八割完成していれば、提出までに余裕を持って詰めの作業に取り組むことができる。

時刻は夜の十時を過ぎた。普段はもう就寝をしている時間だ。そろそろ日記を書く手を止め、就寝に向けて準備をしたい。夕食を摂っている最中から雨が降り始め、今もまだ雨が降っている。明日もどうやら小雨が降る一日となるようだ。

明日は論文の執筆を控え、その代わりとして、中欧旅行で購入した書籍を積極的に読み進めていきたい。また、旺盛な読書に加えて、作曲実践もより充実したものにしたい。

© YOHEI KATO 2018

文章を読み続け、文章を書き続け、曲を作り続ける生活。欧州での三年目の生活では、それらを常軌を逸した形で推し進めていきたい。欧州で過ごす三年目は、常軌を逸した創作行為が必ずや常軌になるだろう。そこからが自分の創作活動の本当の始まりだ。フローニンゲン：2018/4/24（火）22:09

2466. 夢のパターン

今朝は一旦早朝の四時に目が覚めた。直前まで見ていた夢によって起こされる形となった。その夢の中では、自分の内側に潜んでいる攻撃性が表に出ていた。自分の中にある強い攻撃性が夢に出てくることは比較的多い。それらの夢を観察していると、パターンのようなものが随分と見えてきた。大抵は権威的な人物が現れ、権力を振るおうとする人物に対して、それを遥かに上回る力で対抗するような夢だ。

また、夢の中で現れる権威的な人物の無能さを強く指摘することも多く見られる。今朝方の夢の中でも、私が実際に通っていた小中学校の先生たちが現れ、彼らに対して上記のような振る舞いを見せていた。興味深いのは、身体は当時のような大きさでも、内面の成熟度については今と同じなのだ。それにもかかわらず、権威的な人物に対して食ってかかるような攻撃性を示していたのが今朝方の夢の大筋である。

一旦目が覚めた時、この夢について寝床の上でしばらく考えていた。この夢は間違いなく自分の内側にあるシャドーの現れであり、それがどのような特徴を持っているのかについて考えていた。権力を打倒しようとする意思の裏には、権力を渇望する自己の側面がありはしないかと考えた。また、他者の無能さを強く指摘することの裏には、自分の無能さに対する劣等感のようなものがありはしないかと考えた。

おそらく、それら二つはどちらも正しい側面を持っているような気がする。夢には、普段私たちが思っても見ないような自己の影の部分が現れる。権力と無能さというのは、あるいは力の有無というのは自分にとって向き合うべき大切なテーマのようだ。

四時に目が覚めた後、もう一度寝ることにした。今朝の実際の起床は六時半を過ぎた頃だった。

今日は早朝から薄い雨雲が空を覆っている。昨夜から雨が降り続け、今は一旦雨が止んでいるが、午後にまた小雨が降り始めるらしい。今日はちょうど午後からザーニクキャンパスに足を運び、研究インターンの最終評価に関するミーティングを行う。キャンパスに向かうまでの道中、雨が強くないことを願う。

今日は昨日とは異なり、論文の執筆にあえて取り掛からない。一日ほど文章を寝かせる時間を作る。また、あえて一日研究から離れることによって、考えを無意識的に整理していくことを意図している。論文の執筆に着手しない代わりに、今日はいくつか専門書を読み進めていきたい。それらは全て、先日の中欧旅行の際に購入したものだ。

それら全てを本日読むことは不可能であるから、まずは科学哲学に関する専門書、そしてバルトークに関する専門書を読み進めたい。そうした読書に合わせて、今日はバッハの作品に範を求めて曲を作ろうと思う。昨日もバッハの作品を参考にしていたが、今日も引き続きバッハの音楽を参考にする。時間が許せば、バルトークの作品にも範を求めてもう一曲作りたい。今日も静かに、そして着実に自分のライフワークを前に進めていく。フローニンゲン:2018/4/25(水)07:33

2467. 満ち溢れた世界の中で

雲の流れがとても早い。うっすらとした雲の塊が西から東へと早い速度で動いている。地上からでは分からないが、上空に吹いている風はとても強いのだろう。確かに地上においても、今日は昨日よりも風があるようだ。だが、地上に吹く風よりも空に吹く風の方が遥かに激しいように思える。空に吹く風の速度を考えると、今日は天候がめまぐるしく変わりそうだという予感がする。今は雨が降っていなくても、午後から雨が降るという天気予報にもどこか納得できる。

今朝方の夢について日記を書き留めていた時、一度目が覚めた後に再度寝ていた時の夢についても少しばかり思い出した。具体的に夢の内容を思い出したというよりも、夢の中の断片的な映像を少しばかり思い出していた。

夢の中で私は、ベトナムで生活を送ろうとしていた。あるいは、すでに生活を送っていたのかもしれない。いずれにせよ、「ベトナム」という国が夢の中の私の意識を大きく占めていたことは間違いな

い。その夢の中で私は、自分のノートに様々な走り書きをしていた。それは全てその場で思いついた自分の考えであり、それを後ほど日記として文章にしていく計画を持っているようだった。

夢の中の自分が書いていた文字を全て思い出すことはできないが、「深く生きること」と走り書きをしていたのを覚えている。その他にも一文でかなり多くのことをメモしていたように思う。現実世界のみならず、夢の中でも何かを書き留めておこうという意思を自分が持っていることに気づく。

今、このようにして日記を書いている自分を突き動かしているのは、そうした無意識の世界にある根源的な力なのかもしれない。意識的な自己というよりも、無意識的な自己が絶えず自分を突き動かしている。意識的な自己の意思に基づくよりも、無意識的な自己の意思に基づく行為に従事していた方が強い充実感や幸福感を覚えるように思える。

地上に吹く風が激しくなってきた。目の前に見える芽が出始めた街路樹や青々と茂る木々が強風に揺られている。今朝は小鳥の鳴き声は聞こえてこない。こうした風の強い日には、小鳥はどこかで身を潜めているのかもしれない。しかし、よくよく耳を澄ませてみると、どこからともなく小鳥の鳴き声が聞こえてきた。

小鳥はこのような風の強い日にあっても、私の目には見えないところで歌声を奏でているのだ。地上の風が強くても歌い続けるということ。小鳥たちのそうした姿勢に何か感じるものはないだろうか。

薄い雲の塊が東の空へどんどんと移動していくに応じて、晴れ間が見えてきた。今、太陽の光がフローニンゲンの街に強く差し込んできた。風があり、雨があり、太陽の光があり、小鳥の鳴き声がありと、この世界は様々なもので満ち溢れている。フローニンゲン：2018/4/25（水）08:04

2468. 雨上がりの夕方に

雨が上がり、雲間から太陽の光が再びフローニンゲンの街に降り注いでいる。今日は雨が降ったり止んだりする忙しい天気だ。

夕方の四時半を迎えた今、書斎の窓から太陽の光で輝く青々とした木々を眺めることができる。窓ガラスに付着した雨滴もどこか美しく耀いている。

今日は室内にいてもなんだか寒かった。五月を迎えようというのにもかかわらず、午前中は暖房をつけていた。しかしよくよく考えてみれば、これがフローニンゲンの気候なのだ。この時期に暖房をつけていてもおかしくない気温を持っているのがフローニンゲンという街である。

この街で生活をすることによって、五月が初夏だという概念を再検証することができた。そのような概念が通じるのは特定の地域だけであり、同時にそれらの概念が通じないのも特定の地域においてのことなのだろう。この世界には本当に様々な気候を持つ地域があることに驚かされる。先日訪れたワルシャワしかり、ブダペストしかり、それらの土地で生活をしてみれば、旅では分からなかったことが見えてくるだろう。

天候一つをとってみても、様々な場所で生活をすることによって随分と多くのことを学ばされていることが分かる。たかが天候かもしれないが、天候が私たちに与える影響については見逃すことができない。その地域固有の文化は、実はその地域の気候特性と密接に関係しているということを欧州に来て学んだ。気候が私たち自身を育み、文化を育んでいくという側面を蔑ろにしてはならない。そんなことを思う。

差し込む太陽の光の暖かさのおかげで室内も暖かくなり、今は暖房のスイッチを切っている。今日は先ほどまで、自宅から歩いて30分ほどのザーニクキャンパスにいた。そこで研究インターンの最終評価ミーティングを行っていた。このミーティングの前に、スーパーバイザーを務めてくれたトム・スピッツ氏と改めて三十分ほどミーティングを行った。特に、今回のインターンを通じて私が行ったデータ分析の結果と実務的なインプリケーションに関して口頭で報告した。

その後、インターンのコーディネーターを交えて三人で最終評価ミーティングを行った。スピッツ氏から今回の私の研究とその働きぶりに随分と高評価を得ることができて有り難く思う。お互いに働いている曜日や場所が異なっていたにもかかわらず、スピッツ氏は随分と細かく私の働きぶりとデータ分析の成果を見ていてくれたようだった。また、私の性格についても非常によく理解してくれていたことが分かり、大変感銘を受けた。

今回の研究インターンを通じて、研究に関する技術が向上したことのみならず、オランダの職場環境についても随分と理解を深めることができたように思う。これまでは日米での職務経験があったが、

オランダという国の職場環境はそれら両国とはまた異なる点が多々あったことが記憶に新しい。スピッツ氏も話していたが、欧州のその他の国とオランダはまた働き方も含めて随分と異なるだろう。今回研究インターンを行ってみて、複数領域で多様な顔を持って仕事をしていくことがいかに自己を深めていくかを再度確認した。

日本企業との協働プロジェクト、科学者としての研究、インターンとしての仕事など、この一年は随分と多くの実践領域を横断する形で仕事を進めてきたように思う。今日をもってインターンは全て終了し、あとはこのインターンの活動報告をするためのレポートをまとめていくだけだ。そのレポートもすでにドラフトが完成しており、来週の前半にもう一度文章全体を読み返し、修正を施していきたいと思う。本当に全てのことが着実に前に進んで行く。これからもそうした日々を送っていきたい。フローニンゲン:2018/4/25(水)16:45

2469. 欧州で迎える三年目の生活に対する予感

雨が再び降り始めてきた。先ほどよりも勢いのある雨だ。

遠くの空に一羽の小鳥が足早に飛び去っていくのを見た。あの鳥は雨宿りするための場所を見つけるために急いでいたのだろうか。なぜだか分からないのだが、今目の前に降り始めた雨を見て、この街で生活していることの有り難さをしみじみと感じた。

私はフローニンゲンという街で生活をすることによって人間になったのだと思う。失われた人間性を取り戻したと言った方が正確なのだろうか、それとも自らの人間性をわずかばかり深めることができたと言った方が正しいだろうか。いずれにせよ、この街で今このようにして生活を営んでいることがどれほど自分の人生にとって大切なことをかを思い知る。

過ぎ去った二年は本当に貴重であった。実際にはまだ二年経っていない。欧州での二年目の生活はまだ数ヶ月ほど残っているのだ。

八月から欧州での三年目の生活に入る。三年目の生活はこれまで以上に充実したものになると確信している。そうした確信が芽生えている理由についてはここでは書き留めない。

いくつもの幸運に恵まれた形で、三年目においては欧州でのこれまでの生活を一段高次元の空間においてまとめ上げていく。欧州で過ごす三年目は、これまでの二年間以上に積極的に旅に出かけ、より真剣に日記を書き、そして数多くの曲を作っていく。旅に出かけることが目的なのではなく、ましてや世界の観光名所に足を運ぶことが目的なのではない。日々の一瞬一瞬をさらに深めていくこと、そして人生全体をさらに深めていくために旅がある。

そして、そのようにして深められた自己を通じてこの世界に関与していくことが大切になる。その一つの形がまさに、この個人的な日記であり、作曲である。もちろん、ここに日本企業との協働プロジェクトを入れることもできる。それら全てを総括して創造行為と呼ぶのであれば、欧州での三年目の生活は本当に創造行為のみに邁進する日々となるだろう。

ほぼ一ヶ月に一回の旅行以外は、人と会うことをしない。外に出かけるのも近所のスーパーや行きつけのチーズ屋に行くこと、ランニングのために近くの公園に行くことだけに留める。この地での三年目の生活の仕事の中心は自宅の書斎にある。ここが最も魂を安らかにし、精神を集中させることのできる場所だということが明確になってくる。

日記を書き留めていると、雨が止んだ。再び優しい太陽の光がフローニンゲンの街に降り注ぎ始めた。今はすっかり雨雲が消え、しばらくは晴天に恵まれそうだ。

自分のライフワークに日々専心できることの幸運。そして、自らのライフワークを通じてこの世界に参画し始めている今の自分を見て、私は嬉しくなる。

欧州で過ごす三年目もいろいろなことが自分の身に起こるだろう。だが、それら全てを含めて、欧州で迎える三年目の生活は自分の人生にとって果てしなく重要なものになると確信している。

自分がいかように日々を生き、自分が日々何を形としてこの世界に残しているのかについては、自分だけが知っていればいいのである。逆に言えば、自分だけは必ず知っていなければならない。往々にして人は自らがどのように日々を生きているのかを知らないのだから。

日々綴られる日記と日々形になっていく曲は、自らがどのように日々を生きているのかを黙って強く物語っている。フローニンゲン：2018/4/25（水）17:47

2470. 魂の特性と対象との出会い

魂は形がないがゆえに形を求めようとする衝動を持っているのではないか。そんな気づきが夕食中にもたらされた。

形を持つことなく私たちの内側に存在している魂は、どうやらその存在を通じてこの世界に形を生み出そうとするような力を秘めているらしい。人類史において今に残る仕事を成し遂げてきた人物は全て、魂のこうした衝動に従っていたのだ。

魂は形を持っていないがゆえに形を求めようとするというのは、とても純粋な運動のように思える。今、それを「運動」と表現したが、最初は「意思」と名付けようと思った。だが、魂は意思を持つというよりも、意思を超えて絶えず運動し続けている存在のように思えたため、「意思」という言葉を用いず、「運動」という言葉を用いた。

形を求めようとする魂のこの特性について思いを巡らせてみると、欧州で生活をし始めて以降、突如として創造活動に邁進するようになった自分の歩みがよく理解できるようになった。私の魂は、私が生まれてから何十年にもわたってこの瞬間を待っていたのである。私が形をこの世界に生み出すことを待ち続けていたのだ。

一人の人間の創造行為は、その人固有の魂の現れに他ならないということを最近強く思う。そうした思いと夕食時に芽生えた気づきは完全に合致している。それでは、自己の存在とは本質的にはどのようなものを指すのだろうか。おそらく、魂が形としてこの世界に具現化することを支える役割、いやより正確には、魂がこの世界に顕現するための通り道のようだと言えるのではないか。

今、意思を持ってこの文章を書いている私は、魂の通り道だったのだ。学術論文を書くこと、日記を書くこと、作曲をすること。それらの全ては魂がこの世界に形として現れることを促す営みであり、それを行う私という存在は魂とこの世界をつなぐ道なのだ。そのようなことを思う。

夕方の七時半を迎えた。相変わらず日が高く、夕日が燦然と輝いている。先ほどまでの雨が嘘のように、今は晴れ渡る空が広がっている。早朝時に比べて風も穏やかである。風が吹き荒れる時、雨

が降り注ぐ時、そして空が晴れ渡る時、それらのいずれの時も魂は形になろうとして私に働きかけ続けている。どこからともなく魂の声が聞こえてきそうである。

今日はこれから再度作曲実践を行おうと思う。午後からザーニクキャンパスに行くことが分かっていたため、今日は午前中に作曲実践をすでに行っていた。これから作る曲はバルトークの曲に範を求める。作曲実践に入る前に、作曲に関して得られた気づきについて書き留めておきたい。それは、自分が対象に入っていくのではなく、対象が自分に入ってくるという感覚についてである。

先ほど私がはたと気づかされたのは、私が作曲実践に入っていたのではなく、作曲実践が私に入ってきたという経験を私はしていたということだ。作曲を行い始めたのは今から数ヶ月前のことだが、その時の私は作曲を始めたのではなかったのだ。あえて言えば、「作曲が私を始めた」のである。そうに違いない。私は作曲など始めていない。作曲が私を始めてくれたのである。

自分のこれまでの人生を振り返ってみると、今でも探究を続けているものに関しては、全て向こうの方が私の中に入ってきたという感覚がある。発達理論の探究はまさにその一例だろう。私が発達理論の世界に入って行ったというよりもむしろ、発達理論の世界が私の中に入ってきたのである。これは些細なことのように思えるかもしれないが、私にとってはとても大切なことだ。

おそらく、人が一生涯をかけて積み重ねていく仕事との出会いというのはこのように、対象が自分の中に入っていくるという感覚を伴うものなのではないかと思う。それこそが自分の内側での真の出会いと言えるのではないだろうか。私はこの短い人生の中で、本当に素晴らしい出会いをしてきたのだとつくづく思う。その出会いを常に大切にし、自分の魂が形になろうとするための道であり続けたいと思う。フローニンゲン：2018/4/25（水）19:42

2471. 静寂への道

今朝は六時半前に起床した。昨日と似たような薄い雲が空を覆っている。ただし、風は昨日に比べて随分と弱い。目の前に見える街路樹を見れば風の強さが分かる。一本一本の街路樹が静かにその場にたたずんでいる。今朝も昨日同様に気温が低く、昨夜から部屋の暖房をつけっぱなしにしておいた。五月を迎えようというのにまだ暖房が必要なことには驚かされるが、これは昨年もそうであったと思い出す必要があるだろう。

早朝にいつもと同じように一日分のお茶を入れた。ティーバッグに付けられたタグを眺めると、「自己の最大の実現は静寂に至ることである」という言葉が付されていた。その言葉が意味することは、ここ最近私が考えていたことにも合致している。静寂さに至るということ。これがいかに難しいことか。

とりわけこのような現代社会の中で生きて行くに際して、その実現がどれほど難しいかは容易に想像がつくかと思う。だが一方で、自分の自己が確かに静寂に向かって少しずつ歩みを進めているのも分かる。

ブダペストに滞在中、自己が静寂ではなかった瞬間、つまり不要な焦りや動揺を抱えていた瞬間があり、それがとても強く印象に残っている。確かにそれは自己の未熟な点を指摘しているが、同時に、今の自分が少しずつ静寂に向かっていることも示唆している。

今朝も静かな雰囲気が辺りを包んでいる。六時半前に起床した時には、すでに辺りが明るかった。小鳥の美しいさえずりがどこからか聞こえて来る。私は朝のこの時間帯が最も好きだと言えるかもしれない。なぜなら、自己が静寂に包まれ、さらなる静寂に向かって歩みを開始する時間帯だからだ。

今日は論文の執筆を前に進めていこうと思う。昨日一日はあえて論文から距離を置き、一日ばかり文章を寝かせる時間を設けていた。

今日は午前中に協働プロジェクトの打ち合わせがある。科学哲学に関する“Theoretical Knowledge (2005)”という専門書の一読目を完了させておきたいため、打ち合わせの後にそれに取り掛かることにする。論文の本格的な執筆は午後から夜にかけてになるだろう。一日中論文を書くというよりも、数時間ほど論文の執筆に集中し、そうした日を何日間か継続させていこうと思う。

ここから数日間は、論文を数時間ほど書く日々になりそうだ。昨日の日記に書き留めていたように、魂が形になろうとする衝動に忠実になり、論文という形を残していく。午後からの執筆では、“Method”のセクションを書き上げたいと思う。具体的には、今回の研究で用いる従属変数と独立変数の説明をし、今回の研究で適用した「標準化分散解析」についての十分な説明を盛り込んでいく。

© YOHEI KATO 2018

前者に関しては、学習成果である完遂率、クイズスコア、テストスコアという従属変数がどのように算出されたのかを説明する。また、独立変数に関しても同様に、その算出方法について説明をしていく。

標準化分散解析については、数式の説明を盛り込む必要は今回の研究ではなさそうであり、ただしその手法のプロセスについては詳しい説明をしておく必要があるだろう。“Method”のセクションの執筆が無事に終わり、時間がまだ十分余っていれば、“Procedure”のセクションを書き始める。これは明日に回しても問題は無い。論文に関しても焦ることなく、静寂の中で着実に執筆を進めていくことが大切だ。フローニンゲン：2018/4/26（木）07:11

2472. 転調技術の習得に向けて.

先ほどほんのわずかばかり雨が降っていた。今朝方起床した時には薄い雲が空全体を覆っており、今は遠くの空を眺めると、晴れている部分を見つけることができる。どうやら雨雲が私の居住地の上空を通り、瞬間的に少しばかり雨を降らせたようだ。それは本当にごくわずかの雨量だった。書斎の窓ガラスに付着した雨滴の様子を見ればそれが分かる。今週は全体を通して天気が冴えず、私が中欧旅行から帰ってきた日の前後だけが例外的に天気が良かった。来週の水曜日までは晴れた空を拝むことは難しそうだ。

今日は協働プロジェクトの打ち合わせ、科学哲学に関する専門書の読解、論文の執筆に合わせて、作曲実践も旺盛に行っていきたい。もはや作曲実践も日記の執筆と全く同様に、毎日の習慣となった。そのおかげでどれだけ日々が充実感と幸福感に満ち溢れたものになったことか。その恩恵は計り知れない。これはきっと、昨日の日記で書き留めていたように、私たちの魂が持つ特質と関係しているだろう。

形を求め、形を創造することを強く希求する魂の特質を考えてみれば、そうした習慣によって日々が充実したものに感じられるというのも納得がいく。魂が内在的に持つ「造形性」と今日も寄り添いながら、創造行為に励んでいく。

昨日ふと、転調の技術についてより理解を深めたいと思った。これは以前から思っていたことだが、転調という技術をより深く理解し、それを自由自在に自分の曲の中で適用したいという思いが強くなっ

た。そのきっかけを生んだのは、昨日バッハの曲をずっと聴いていたことだろう。私は、どの作曲家が最も優れた転調の技術を持っていたのかは分からない。その点についてはぜひとも知りたいところだ。現時点では、バッハはそうした作曲家の一人なのではないかと思う。バッハの曲に範を求めることはこれまで何度もあったが、これからは転調という観点をより明確に持ってバッハの楽譜に接しようと思う。

転調について学習を進めていると、移行しやすい調があることを学び、移行の仕方についても方法があることを知った。その事実については少し前に知っていたのだが、まだその知識を自分の曲の中で適用することができない。ある調から別の調に移行する際の相性については一覧表があるため、転調させようとするときにはその表をスキャフォールディングとして用いればいい。今の私がより理解を深め、適用を上手くするべきことは、二つの調が共通に持つコードである「ピボットコード」の扱いだ。

どのコードをピボットコードにすれば転調がスムーズになるのかを理解し、自然な形で調を移行させる術を習得していきたいと思う。もちろん、急激な調の変化も時に必要になるが、調をグラデーションをかけるように変化させる技術を習得することは必須だ。一日の時間帯に応じて変貌する内面・外面世界の様子を的確に表現するためには、そうした転調技術が不可欠となる。作曲に関しても、とにかくゆっくりと着実にその技術を高めていきたいと思う。全ての物事を緩やかに確実に前に進めていくことが大切だ。フローニンゲン：2018/4/26（木）07:32

No.990:A Path of Souls

There seems to be a universal path and diverse ones of our souls. Groningen, 08:32, Friday, 5/18/2018

2473. 欧州での旅のあり方と井筒俊彦先生の書籍

今日の天気の気まぐれさには、気まぐれな私も思わず笑ってしまうほどだ。起床直後に薄い雲が空を覆っていたかと思うと晴れ間が広がり、晴れ間が広がっているかと思った矢先に激しい通り雨が降り、今は再び晴れ間が広がっている。フローニンゲンの春の動きは往々にして穏やかなのだが、

時に力強さを感じる。そして、春の気まぐれさは決して悪くない。その証拠に、私はその気まぐれさを見て思わず笑みをこぼしていたのだ。

先ほど昼食を摂り終え、これから作曲実践を行った後に論文の執筆を行っていく。昼食前に“Theoretical Knowledge (2005)”の一読目をようやく終えることができた。ブダペストの古書店で見つけたこの書籍は本当に傑出した内容を持っていた。当然ながら、一度をしただけでは全ての事柄を深く理解することはできない。

科学哲学について、とりわけ科学的な知というものがどのようなプロセスとメカニズムで体系的な発展を遂げていくのかを今後考える時、この書籍を必ず参考にするだろう。先日の中欧旅行の際に本書と出会うことができたことに本当に感謝をしている。

欧州で迎える三年目は、積極的に旅に出かけたいと以前の日記に書き留めていたように思う。その旅のうち、半分は文明の発達した都市で時間を過ごし、もう半分は自然の中で時間を過ごすことになるかと思う。仮に都市で時間を過ごす際には、ぜひとも滞在先の都市の古書店を巡るようにしたい。もちろん、その街を代表する美術館にはできるだけ足を運ぼうと思うが、今は美術作品よりも、ある一人の人物に関する資料が展示された博物館から得るものの方が多く、古書店での出会いの方に魅力を感じている。

また、教会があるような都市に行くのであれば、そこで行なわれているオルガンコンサートにできるだけ参加したいと思う。ブダペストの聖イシュトヴァーン大聖堂で聴いたオルガンの音が今でも忘れられず、オルガンが生み出す音の大伽藍の心象イメージが今も自己の存在の内側に鮮明に残っている。

旅の区分は文明と自然の二つであり、仮に両者が見事な調和を成しているような場所が存在するのであれば、それはなお望ましい。文明の発達した都市では、自分の存在に共鳴するごく限られた博物館と美術館だけを訪れ、あとは教会で音楽を聴くか街の古書店を巡る。一方、自然の中で過ごす場合には、ひたすら観想的な時間を過ごすようにしたい。中欧旅行を終えたばかりだが、欧州で過ごす三年目に訪れる旅について少しばかり思いを馳せていた。

昼食前に“Theoretical Knowledge (2005)”を読み終えた後、それをどこに置くかを考えていた。すでに本棚には本が一杯になっており、書斎のソファーや小さな食卓の上にも書籍や論文が積み重なっている。本書はとても重要な本であるため、本棚にある既存の書籍と入れ替えようとしていた時に、偶然にも井筒俊彦先生が執筆された二冊の書籍に目が止まった。どちらも井筒先生が英語で執筆されたものであり、そのうちの一冊である“Toward Philosophy of Zen Buddhism (1982)”に思わず手が伸びた。

随分と前に本書を一読していたが、それからどれくらいの時間が経ったかを忘れてしまうほどだった。中身をざっと眺めてみたとき、本書をもう一度じっくり読み進める必要が強くあることを直感的に理解した。人間発達に関する科学的な探究を進めていけばいくほど、人間存在を思想的かつ哲学的に探究していくことの大切さに気づく。本書の中の一節に、「音楽は私たちの存在の全ての場を満たす」という記述がある。

これは大変興味深い記述であると同時に、この記述が意味することの深さには思わず身震いしてしまう。この夏、井筒先生が執筆した本書をゆっくりと読み進めたいと思う。それを行う必然性と意味が私の中にあることを知っている。フローニンゲン：2018/4/26（木）13:02

No.991:A Path of A Rainbow

I was perceiving kaleidoscopic inner images before going to sleep last night. It seems to me that a path of ever-changing perceptual inner images may exist. Groningen, 08:24, Saturday, 5/19/2018

2474. バッハとこれからの十年

今日も一日が充実感に満たされた形で終わりに差し掛かっている。毎日毎日が組成された形で静かに進行していく。

日々自分が行っていることは読むこと、書くこと、曲を作ること。そうした創造行為だけが自分の毎日の中にぽっかりと浮かび上がっているかのように思えることがある。浮かび上がった創造行為を「自分のような自分でないような自分である者」が眺めている。今日という日が存在していたのか否かについては、正直なところ私は分からない。

だが、自分が書き留めた日記と今日作った曲を見れば、確かに自分が今日という日を生きていたということが分かる。生きるという実感は、何かを生み出す過程の中で徐々にその本質を露わにしていくのではないか。生きるという実感も造形性を持つのだろうか。きっとそうだろう。

生きることの意味も意義も、自らがこの世界に対して創造行為によって参与することによって徐々に形になってくるのである。そう思わずにはいられない日々が続く。今日もそうした一日だった。

ここ最近、バッハの音楽をピアノだけではなくて、オルガンでも聴くようになった。よくよく考えてみると、もともとバッハは教会でのオルガン演奏用に数多くの曲を創造していたのである。二年前の夏にライプチヒに訪れた時の記憶が蘇ってくる。バッハが実際に演奏をしていた教会とバッハ博物館を訪れた時の記憶が再び蘇ってくる。バッハのオルガン曲に耳を傾けながら、いつかまたライプチヒを訪れ、バッハが生きたあの場所に行く必要があると強く思う。

今日は昼食後に、バッハの曲に範を求めながら作曲をした。おそらく、いやほぼ確実に、バッハの音楽の中には何かが隠されているのだと思う。実はバッハはそれを隠そうとしたのではなくて、明確な形で表に出そうとしたのであり、実際にそれは常に表に出ている。気づけないのは私の内面の成熟が足りないからに他ならない。

もっと深くバッハの音楽を理解したいと切望する。演奏家ではない私にとって、バッハの音楽を深く理解する最良の手段は、彼が残した楽譜に対して「実存的分析」を施していくことだろう。知的な分析であってはならない。確かにそれは必要だが、それだけでは何も見えてこない。何かが見えるためには知的分析を超えていかなければならない。存在の基底からバッハの音楽を掴むような実践が必要になる。ライプチヒのバッハ博物館で見た資料に関する記憶を辿ってみると、バッハはほぼ毎週新たな曲を作曲していたことを思い出す。

密度と強度の保たれた崇高な曲を毎週生み出すことができたバッハには深く感銘を受ける。今書斎の中に鳴り響いているオルガン曲もその一曲なのだ。バッハでさえも、あるいはバッハであるがゆえに、彼は日々絶えず曲を書き続けた。その姿勢を深く深く見習う必要があるだろう。

もしかしたら、私が何かを真に始めるためには、自分に対してあと十年の猶予を与えていいのではないかと思い始める。いや、果たして十年かけて準備が整うのかさえも危うい。唯一の救いは、自分

© YOHEI KATO 2018

がこの人生において何をすべきであるか、何をすべきでないのかが明確になりつつあることだろう。また、日々をいかに生きればいいのかということが明白なものとなり、日々の生活は徐々に、自分が真にその日一日を生きたと言えるほどの密度を持った時間の流れを持つようになった。

あとはこれを十年間継続させていくことである。それを妨げることから一切手を引き、そうしたものに一切関係を持たないようにする。自分の人生にとっての明日もおそらくあるような気がする。それは明日になったら分かることであり、明日を最大最良に生きた時に分かることだ。フローニンゲン：2018/4/26（木）21:54

No.992:Fluttering Petals

It is already the end of May, but it is still cold in Groningen. I can see petals fluttering in my mind. The dance is very vigorous. Groningen, 09:04, Sunday, 5/20/2018

2475. 国王生誕日の夢

今朝は六時半前に起床し、六時半を少し過ぎてから一日の活動を開始させた。起床した頃には、辺りはすっかり明るくなっていた。今朝は雲がほとんど無い。うっすらと晴れ渡っており、空に何羽かの鳥が舞っている。

ここ数日間はまた寒さが戻ってきて、室内では相変わらず暖房をつけている。書斎の暖房は一日中つけっぱなしにしており、就寝中も書斎の暖房をつけておかなければ一日の活動の開始時にとても寒く感じられる。昨夜は湯たんぽを再び使い出した。これが五月を目前に控えたフローニンゲンの気候である。

窓の外の穏やかな景色を眺めながら、今朝方の夢について思い出していた。早朝に見ていた夢の中で私は、どこか大きな波止場のような場所にいた。そこで海を見たわけでも、船を見たわけでもないのだが、そこは波止場の雰囲気を持っていた。その波止場はかなり大きく、たくさんのレストランがあり、その他の商業施設も充実していた。

私は波止場にある中華料理店に足を運びたいと思っており、そちらの方に向かうと、セキュリティーゲートに捕まった。そこは空港にあるセキュリティーゲートと役割は一緒であり、何か危険なものを持っ

ていないかどうかを確認し、身分を確認することが義務付けられている。前に並んでいた人たちはすんなりとセキュリティーゲートをくぐり抜けて行ったのだが、なぜだか私は入念なチェックを受けた。どうやらランダムでそうした厳密なチェックを行うようになっているらしかった。

なぜだか私は自分のパスポートではなく、父が自分と同じぐらいの年齢の時に撮影した写真が記載されたパスポートを持っていた。これでは身分証明のところで追い返されてしまうと思った。

小柄な一人のオランダ人の中年男性がセキュリティーゲートで人々の対応をしており、私はその人からあれこれと質問を受けた。質問だけではなく、私が顔を偽っていないかを確認するためか、何か特殊なジェルを私の顔に塗り始めた。もし顔を偽っていれば、そのジェルによって真の顔が露わになるようだった。特に顔を偽ってもいない私は、そのジェルを塗られても別の顔が出てくることはなかった。

検問官の男性：「ご協力ありがとうございました。何も問題ないようです」

私：「それにしてもやけに念入りな検問でしたね」

検問官の男性：「ええ、ここのところ物騒ですから。ちょっと奥にいる者と最終確認をしてきますね」

私：「はい、分かりました」

検問官の男性は、荷物の検査をしている二人の女性の検問官と最終確認をするために、彼女たちの方に向かっていった。すると、一人の女性の検問官が男性の検問官と共に私のもとにやってきた。

検問官の女性：「先ほどはご協力どうもありがとうございました。お礼にこちらをどうぞ」

私：「いえいえ。ん？歯磨き粉？Dank u wel!（どうもありがとうございます！）」

検問官の女性は、随分と時間を取って検問をしたことを私に詫び、検問に協力したお礼として歯磨き粉のチューブを私に手渡した。それを受け取った瞬間は、なぜ歯磨き粉が差し出されたのか理解できなかったが、とりあえずお礼の言葉を述べた。

検問中はずっと英語でやり取りをしていたのだが、最後のお礼だけオランダ語で述べた。すると、二人の検問官は微笑んでいた。

セキュリティーゲートを無事にくぐり抜けると、そこにはレストランがたくさん並ぶフロアが広がっていた。予定していた中華料理店に向かおうとすると、最後にもう一つゲートをくぐらなければならなかった。そのゲートは、先ほどの空港にあるようなゲートとは異なり、10人ぐらいが入ることのできる公衆電話ボックスのような姿をしており、そこに置かれている一台一台の機械を通じて、自分がゲートの先で何時間過ごすのかをあらかじめ決めたチケットを購入する必要があった。

私の目の前には「五時間」のチケットが買える機械が置かれていたが、五時間は長いと思ったため、三時間のチケットを購入することにした。三時間でも少し長いぐらいだったが、念のためそれぐらいの時間を確保することにした。この公衆電話ボックスのようなゲートを抜けた後も夢は続いていった。

今日はオランダの祝日のようだ。どうやら国王生誕日とのことである。確かに普段の金曜日以上に静かだ。今日も静かに時が流れ、静かな充実感を感じられる日になるだろう。フローニンゲン:2018/4/27(金)07:19

<u>No.993: Colors and Shapes of Each Emotion</u>

I’ve realized the intrinsic colors and shapes of each emotion, which is quite intriguing, and this emotion also has a unique color and shape. Groningen, 08:24, Monday, 5/21/2018

2476. 言葉の密度と強度と一日の充実感

今日は国王の生誕日ということもあり、オランダは祝日の雰囲気に包まれている。フローニゲンの街を見るだけでも、他のオランダの都市の様子まで分かってしまうかのような予見的感覚が今の自分の中にある。

オランダの祝日に少しばかり注目をしてみると、そこにはオランダの文化が滲み出ていることが分かることがある。例えば、今日の祝日について考えてみると、オランダには国王がいることに気づく。これは文化的かつ政治的な要素を内に含んでいるだろう。国の祝日とその国の文化とは密接に繋がっ

© YOHEI KATO 2018

ているらしい。今日は祝日であるが、近所のスーパーも行きつけのチーズ屋も開いているようなので午後から足を運びたい。

今日の仕事を開始しようと思った矢先に、今朝方見ていた夢の続きについて少しばかり思い出した。二つのセキュリティーゲートをくぐった後に、中華料理店で食事を摂ろうと思っていたが、オバマ元大統領に偶然出会ってその場で立ち話をしていた。

何について話をしていたのか覚えていないが、お互いに日本語で話をしていた。なぜだか私はオバマ元大統領に遭遇した時に、彼が米国人であることを忘れており、先ほどのセキュリティーゲートではオランダ人の検問官と英語で話していたにもかかわらず、オバマ元大統領とは日本語で会話をしていた。

しばらく会話をしたのち、オバマ元大統領が驚くほどに流暢な日本語を話していることに気付かされた。特に私が驚いたのには、密度と強度の伴った日本語をオバマ元大統領が話しているということだった。このような日本語を話せる日本人はほとんどいない。そのことに驚かされたのと同時に、もしかすると日米関係の都合上、オバマ元大統領は日本語を学ばざるをえない状況にあったのかもしれないと思った。それは両国の力関係の観点ではなく、政治戦略的な観点においてである。夢の中でそのようなことを考えていると、目覚めの時間がやってきた。

今日はこれから論文の執筆を行う。昨日も三時間ほど論文の執筆に時間を充てており、今日もそれと同じぐらいの時間を充てようと思う。昨日は午後から執筆に取り掛かったが、今日は午前中から執筆に取り掛かる。昨日に“Method”のセクションを全て書き上げる予定でいたが、いろいろと調べながら慎重に文章を書き進めていたため、最後の二つの項目の執筆に着手することができなかった。今日は午前中にそれら二つの項目を書き上げ、“Procedure”についても少しばかり着手したいと思う。

論文の執筆も焦らず着実に進めていくようにする。すでに論文の全体観を掴んでおり、何をどのように執筆していくかの方向性も見えている。そのため、焦ることなく、密度と強度の伴った文章を構築していきたいと思う。夢の中でオバマ元大統領が用いていたような硬質な言語空間を論文の中に築き上げていく。

© YOHEI KATO 2018

昼食前に論文の執筆を切り上げ、午後からは協働プロジェクト関係の資料を二つ作成したい。どちらも文章を書くことが要求されており、本当に日々の私の仕事は書くことと不可分なのだと知る。密度と強度の伴った言葉を外側に形にしていくことは、その日の充実感を左右しているのではないかとさえ思い始める。とにかく今日も、書くことを通じて充実した一日にしたいと思う。フローニンゲン:2018/4/27(金)07:41

2477. 真善美の現れ

分からないなら、分かるまで書く。見えないなら見えるまで書く。何かが分かっても、何かが見えてもなおも書く。何かが全て分かることも見えることもないのだから。

書くことの意義と力が日ごとに露わになっていく。同時に、書くことに終わりはないのだということもすでに知ってしまった自分がいる。書くことは人生の最後の瞬間まで続いていく。

今日は一切風がなく、目の前に見える街路樹も静止しているかのようである。それでいて、生命の躍動感を確かに感じさせてくれるのだから、自然というのは本当に偉大だと思う。静の中に動を見出し、動の中に静を見出す。そこから静も動も超えた境地を見出していく。

起床直後よりも空が晴れ渡り、午前中のフローニンゲンの空は快晴となった。随分と大きな飛行機雲が空に見える。その飛行機雲がある空はここから近くにある空なのだろう。

先ほど、真善美について少しばかり新たな気づきがあった。それらの領域は互いに独立しているが、相互に影響を与え合っている。それぞれの領域には固有の深さがあり、それは段階構造を持つ。米国の思想家のケン・ウィルバーのインテグラル理論を基にすれば、それらの領域は平等に扱われる。しかし、ウィルバーが参考にしていたカントやボールドウィンは、美を司る領域を最上のものにしていたことをふと思い出した。

彼らの考え方の中に、何か大切なものが内包されているのではないか、自分は何か重要なことを見落としているのではないか、と思った。私自身が作曲実践を始めたためか、そして欧州各地を旅行しながら様々な美術館に足を運ぶことが多くなっているためか、真や善を超える何かが美の中に潜んでいるように思えて仕方ない。

もしかしたら、美というのは真や善の出発地点であり、なおかつ真や善の終着地点なのではないかと思えてくる。科学と哲学の探究に従事している際の自分を振り返ってみると、しばしば真や善の判断に美的なものが含まれていることに気づく。限りなく真実なものには美が宿り、限りなく善なものにも美が宿る。そんなことを感じるのは私だけではないのではないだろうか。

普段科学と哲学の探究に力を注いでいながらも、今の私は芸術に強い関心が向かっている。芸術が科学と哲学を根底から支え、なおかつそれらよりも上位の場所に存在しているような感覚を最近感じる。芸術は科学と哲学の出発地点であり、それらの終着地点であるかのようだ。

日々の時間の流れが緩やかなのと同様に、自分の思考も緩やかに進んで行く。科学や哲学は語ろうとする。だが、芸術は語ろうとしない。これは大きな違いなのではないだろうか。科学や哲学は語ることを通じて仕事がなされていく。一方、芸術は語ることをせずして仕事がなされていく。確かに芸術は、作品という形を通じて何かを私たちに語りかけてきているかのように思えるかもしれない。

しかし、それは語りかけてきているというよりも、より直接的に私たちの感覚に触れているだけに過ぎない。科学や哲学と芸術の間には大きな違いがあることが感覚的に明確になりつつあるのだが、その違いをうまく説明するための言葉が今の私にはない。感覚が自分の言葉を凌駕している。いや、まさにこれこそが両者の違いの根元にあるものだと言えるかもしれない。

そうだ、科学や哲学は生々しい感覚を出発地点にしながらも、それを言葉によって純化していく。一方、芸術は生々しい感覚をその生々しさを残したままで私たちに提示してくる。その提示を受けて言葉を紡ぎ出すか否かは芸術の知ったことではなく、それは私たちが勝手に行う行為に過ぎない。芸術がもたらす生の感覚。

芸術は私たちの直接的な感覚に働きかけ、私たちの存在を一掴みにしてしまう力を持っており、そうした力の一端を科学や哲学も持ち合わせているだろうが、それらは私たちに語ろうとするがゆえに、感覚に訴えかける直接性が希薄化される。科学、哲学、芸術に関する探究をもっと真剣に推し進めていく必要がある。自分の中にはそれらの特質や意義に関して分からないことが山積みにされている。だが、こうした少しずつ見えてきたものを書き留めていくことによって、それら三つの領域の奥深くに眠っているものが徐々に露わになってくるのを実感している。

© YOHEI KATO 2018

先ほど暖房のスイッチを切った。書斎の窓を開け、空気の入れ替えを行っている。確かに書斎に入り込む空気は冷たいが、自分の内側は熱を帯びている。真善美に満たされた生活。生きることは真善美の果てしない探究であって、実は生きることそのものが真善美の現れに他ならないと知る。フローニンゲン:2018/4/27(金)09:31

2478. 調和的進化に向かって

今日は早朝から随分と日記を書き留めているように思う。予定していた論文の執筆はこれからだ。

今日は祝日ということもあってか、本当に平和な雰囲気がフローニンゲンの街に漂っている。クリスタルのような春の一日。そんな一日の一瞬一瞬を今日も大切にしたいと強く思う。なぜなら、私たちの人生は今という瞬間の結晶に他ならないからである。先ほど洗濯を終え、ゴミを捨てに外に出た時、足元に種類の異なる虫を見つけた。

それらの虫が生きる姿を見て、どこか励まされるものがあった。それらの虫が懸命に生きていたかどうかは定かではない。生きているということそのものが私を打ったのである。同時に、多様な種類の生物がこの世界に存在しているということに対して、改めて心を打たれるものがあった。多様な空間に多様な生物が存在しているということ。そしてそれらの生物は各人固有の多様な時間を生きているということ。それはこの世の実相なのではないだろうか。

財産を残すのではなく、生きた証を残すこと。それこそ、欧州で学んだ最大のことではなかったか。そんなことを先ほど突発的に思った。人は財産を築き上げようとし、財産を残そうとする。だが、往々にしてそうした人は真に生きることが何なのかを忘れ、生きた証をこの世界に残すことができない。そこに残るのは平準化されたカネだけであり、平準化されえぬ一人の人間の固有の生の証が残ることはない。

過去の偉大な芸術家、思想家、科学者が残してきた仕事の価値と意義を、欧州での生活を通じて強く実感するようになった。彼らが残したのは、平準化されたカネでは決してなかった。固有の精神と魂の宿った形が、幾千年の時を超えて今もなおここにある。ワルシャワでもそれを見た。ブダペストでもそれを見た。昨日目を通した森有正先生や井筒俊彦先生の書籍の中にもそれを見出した。

人類全体の共有資産としての形を残していくことの意義と大切さ。今の自分にできることはほとんど何もない。しかし、一人の人間が真に生きたことの過程を絶えず形として残していくことなら何かできることがあるかもしれない。この一連の日記や毎日生み出す曲がそうしたものの一端を担ってくれればと思う。

先ほど自宅の外で見た虫たちの存在を思い出さなければならない。彼らがいるからこそ、この世の多様性が確保されているのだ。そして、そうした多様性こそがこの世界の調和に不可欠なのだ。

一人の人間の生きた証を残す試みは、決して自己を誇示するようなものであってはならない。そうではなく、生きた証を残すということが、多様性を平準化しようとするこの世の風潮に対する不可欠な抵抗であり、極めて大切な打開策であるということを理解する必要がある。

自らの固有の生を生きたという証は、平準化の流れに抗い、この世界の多様性をさらに豊かなものにする。この世が調和的進化を遂げるにはそれが必要なのではないだろうか。フローニンゲン：2018/4/27(金)10:36

2479. 仮眠中の現象の探究に向けて

ここのところ良い意味で天気予報が外れることが多い。今日は午後から雨が降る予定だったのだが、その気配は今のところ全くない。確かに少しばかり分厚い雲が空に浮かんでいるのが見えるが、今は太陽が輝きを見せている。国王の生誕日にふさわしい一日だ。

先ほど行きつけのチーズ屋に足を運んできた。その道すがら、街の中の家々にオランダ国旗が掲げられているのを見た。この国の国民は愛国心が強い傾向にあるのかもしれない。さらにそれを裏付けるかのように、街中には人々がオランダを象徴するオレンジ色の帽子や冠のようなものを被っており、国王の生誕日を皆で祝福している。チーズ屋に到着するや否や、チーズ屋の女性店主が、店内には他に誰もいないにもかかわらず、「ここにいる国王の姿が見える？」と笑顔で尋ねてきた。

唐突な質問だったので何を問われたのか一瞬わからなかったため、質問を聞き返した。そこでもまた同じ質問が飛んできた。そこで私は、その質問の意味を自分なりに解釈し、「姿は見えないが感じることならできる」と答えた。その答えに店主は嬉しそうに微笑んでいた。

その後、店主といつものように雑談をしていると、日本と同じように五月の最初の週はオランダも休みが続くそうだ。この二年間それに気づかなかったのは、どうやらフローニンゲン大学はそうした風習とは異なる形で動いているようだったからだ。

私は店主に、日本でも同じような週があり、それを「ゴールデンウィーク」と呼ぶと教えた。オランダにおいては、それは祝日と呼べるようなものではなく、歴史を紐解けば、戦争に関する休日として制定されたものらしい。両国において同じように休日が続く週があるにもかかわらず、その歴史的背景や文化的意味合いが異なることは興味深かった。

チーズ屋の店内から再び街に一歩踏み出した時、多くの人々で街が賑わっていることを改めて感じた。こうした祝日も気付けばこれから夕方に向かっていく。

午前中に数時間ほど論文の執筆に集中したおかげもあり、予定していたところまで執筆が進んだ。明日もまた同じぐらいの時間をかけて少しずつ前進したい。要諦は一回で多く進まないことである。論文の執筆に時間を充てるのは一日のうち数時間で十分だ。三時間、あるいは二時間で十分だろう。その時間を集中して少しばかり前進していくことが肝要だ。一気に彫刻を掘るのではなく、少しずつ丁寧に掘っていくこと。それを自分の仕事の信条にしたい。

先ほど仮眠を取っている最中にふと、日記の執筆というライフワークを継続させていきながらも、それとは別に論文の執筆も自らの仕事であるという明確な認識のもとに継続して論文を執筆していきたいと思った。どちらも表現形式が異なり、開示される真実と深められるものが異なるゆえに、片方だけに従事していてはならない。確かに私にとってより重要なのは日記の執筆に違いないが、学術論文も継続して書き進めていく。

型に沿うという煩わしさの中に固有の価値を見出す。文章を書くという実践に関しては、日記と論文の執筆の双方をこれからも継続させていくという意思を再び明確なものにした。

今日の仮眠を取り終えた後、いつも以上に不思議な感覚があった。仮眠の短い時間を通して、自分がどこか全く別の時空間にいたような感覚に包まれたのである。あるいは、自分の内側で全く新しい何かが始まった感覚と述べてもいいかもしれない。仮眠中の現象と仮眠後の自分の意識状態

© YOHEI KATO 2018

というのは、もしかすると真剣に観察する意義のあるものなのかもしれないと思えてくる。仮眠中に間違いなく何か大切なことが起こっている。

それを見逃さず、その現象がどのような意味と性質を持っているのかを今後できるだけ書き留めていきたいと思う。夜の睡眠中に見る夢についてだけ文章を書き留め、仮眠中の現象を蔑ろにするというのはどこかおかしい。どちらも探究に値する何かを含んでいる。少しずつでいい。少しずつ、自分とこの世界を知っていこうと思う。フローニンゲン:2018/4/27(金)15:06

2480. 突然の促し:デッサンの始まり

風がピタリと止み、微動だにしない世界が目の前に広がっている。時刻は夕方の七時半を迎えた。この時間帯のフローニンゲンはまだまだ明るい。

今はうっすらとした雲が空を覆っているが、西の空は雲が少なく、その方向に夕日を眺めることができる。「今日が終わりに向かおうとしている」というこのシンプルな気づきの中に潜むなんとも言えないこの感覚をどのように表現したらいいだろうか。今日という一日が存在していたことがどこか不思議な感じがする。また、「今日という一日が存在していた」と言える自分のこの感覚にも不思議な思いを持つ。

自分が時間の流れの中にいるのか、時間が自分の中にいるのか分からない。ただ、今の自分の感覚に忠実になるならば、時間とはもしかすると私たちの内側から淀みなく流れていくものなのかもしれない。時間が内側から流れ出しているようでいて流れ出していないようであり、時間が内側から流れ出していないようでいて流れ出しているようであるというこの感覚は、時間の充満性を表しているのかもしれない。

自己は時間で満たされており、時間は自己に満たされている。そんな関係性を見て取ることができる。時間と自己の存在は等しく奥深い。全く分からなぬことが無数にある一方で、少しずつ見えてくるものがある。それこそが時間と自己の本質がなすことなのだろう。

先ほど入浴を終えた時、私はふと新たな習慣を一つ加えることにした。「デッサンをしよう」という思いが突然やってきた。

これまで私は日記や作曲を通じて、自分の内側にある思念や感覚を形にしてきた。何を思ったのか、それらに加え、日々の生活の中でデッサンを描いていくことを決心したのである。自分の内側で沸き起こる思念や感覚をデッサンとしてノートに描いていく。それは今日から始めた実践だ。

夕食後に早速二つほどデッサンを行った。言うまでもなくこのデッサンは、物理的な眼で見たものを描くのではない。心眼もしくは魂眼によって捉えられたものを忠実に描くことを指す。デッサンを行う際には、描かれた絵の主題とそれを描いた時間帯を必ずメモするようにする。言葉や曲として形にできないことをデッサンに委ねる。それを今日からの確固たる習慣にする。

何かが湧き上がってきて、それを絵として残しておきたいと思った都度デッサンを行う。何か特定の制約条件など求めることはしない。「絵として形になろうとするものは絵として、言葉として形になろうとするものは言葉として、曲として形になろうとするものは曲として形に残していく」という精神で今日からの日々を過ごす。それは至ってシンプルな生活実践だ。

仮に意識的に行うことがあるとすれば、感銘を受けた音楽をあえて絵として表現しておくことであり、早朝の目覚めの時、夢の印象が残っていればそれを絵として形にしておく。前者に関しては、作曲実践で参考にする曲に対してはその曲から喚起されるものを常にデッサンとして残しておくのは良い案かもしれない。

それはノートに描いてもいいし、楽譜に直接残しておいてもいいだろう。その曲を聴いて喚起されたものは貴重であるため、それはやはり楽譜に直接描いておくのがいいかもしれない。とりあえずそうすることにする。また、自分が作った曲に対して喚起されたものについては、自分の作曲ノートにデッサンを残す。これらをする目的はなんだろうか？

目的などない。それを行う必然性が自分の内側にあるだけであり、それを行う促しが今日やってきたからそれに従うまでだ。フローニンゲン：2018/4/27（金）20:02

© YOHEI KATO 2018